

## 第2章 『永遠の都、海の都 –インド洋と西欧の間に位置して–』

ここはイアン・フレミング好みの地である。ガラタ塔からの眺めが素晴らしい。かつて、シルケジ駅からエルキュール・ポアロもオリエント急行に乗り込んでいる。1453年4月22日、コンスタンティノープル守備隊は目を疑った。金角湾を挟んだ向かいの丘を越えて、半月旗を掲げた72隻の艦隊が湾内に侵入してきたのである。今まさにビザンティン帝国（東ローマ帝国）は1000年の歴史を閉じようとする。

攻めるはメフメット2世率いるオスマン・トルコの10万。この人物は一度帝位につきながら父親によって退居させられ、父親の死によって再び帝位に復帰するという変わった経歴を持つ。このため、かなり歪んだ性格であったらしい。一方、コンスタンティノープルを守るは7千、うち、2千がヴェネチアやジェノヴァからの援軍である。

このコンスタンティノープル攻防戦の後、オスマン・トルコとヴェネチアは、インドと西欧の間に位置するという地政学的条件によって、あるときは協調しつつも熾烈な戦いを繰り広げるといふ複雑な関係を持つこととなる。オスマン・トルコはオスマン家に参集した多民族国家・多国籍軍という色彩が強く、領土の拡大が至上目的であり、他方のヴェネチアは言うまでもなく拝金主義の通商国家である。ところが、両国が戦うときには、それぞれがイスラム教とキリスト教を背負うこととなる。まずは、両国がここに至るまでの過程を振り返ってみたい。

(以下 工事中)